

人口減少は文明の転換期に現れる現象。 「成熟社会」「超高齢社会」にマッチする 新たな社会システムや地域づくりが求められる。

文明システムの転換期に 人口は停滞・減少する



きとう ひろし
鬼頭 宏

(上智大学経済学部教授)

1947年静岡県生まれ。1969年慶應義塾大学経済学部卒業。1974年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。1980年より上智大学に奉職。

現在、経済学部・大学院地球環境学研究科教授。専門は経済史・歴史人口学・歴史環境学。国土審議会計画部会委員も務めている。

主な著書に、『日本の歴史 19 文明としての江戸システム』講談社、『環境先進国 江戸』PHP 研究所、『人口から読む日本の歴史』講談社（学術文庫）等がある。

私の専門は「歴史人口学」といって、人口の観点から世界や日本の歴史を分析・研究している。人口の増減というのは、文明や社会システムと密接に関わっており、過去の歴史を分析することで、未来に投影できる知見が得られると考えている。

今、日本は人口減少社会に入ったと大騒ぎしているが、世界の歴史を見ると、人類は何度か人口が停滞したり減少する経験をしている。例えば、西ローマ帝国の崩壊（5世紀）や漢帝国の崩壊（3世紀）の時期には、世界人口が減少したと考えられている。同様に14～15世紀には、ヨーロッパを中心に世界人口が減っている。

減少の理由についてはよく分かっていないが、ペストなどの疫病の影響、気候変動（寒冷化等）や農耕技術の限界（人口を支えるだけの食糧生産ができなくなる）などがあげられる。

日本では、縄文時代の後半や平安時代、江戸時代の後半に、人口が停滞・減少している。日本の場合も原因については、気候変動や疫病などいろいろな事象があげられているが、私は、そうした時期がいずれも、文明システムの転換期にあたることに注目している。

縄文時代後半の場合は、「狩猟採取経済」の文明システムから、「水稲農耕化システム」に移行する時期にあたる。平安期は、律令国家が水田を管理するシステムから荘園などによって私有化が進行した時期にあたる。江戸時代後半は、鎖国をしていたために完全に自給自足であり、当時の農業生産技術で支えられる限界の3,500万人に接近したことが人口停滞の原因だったと考えられる。

<文明システムの比較>

	<縄文期> 縄文システム	<弥生～平安期> 水稲農耕化システム	<鎌倉～江戸期> 経済社会化システム	<明治～現在> 工業化システム
最高人口密度 (人口)	0.9人/km ² (26万人)	24人/km ² (700万人)	112人/km ² (3,258万人)	338人/km ² (12,778万人)
文明の段階	自然社会 (狩猟漁労採取)	農業社会 (直接農産消費)	農業社会 (間接農産消費)	工業化社会
主要な経済様式	伝統経済	伝統+指令経済	伝統+指令+市場	市場経済
社会集団	バンド社会	ウジ社会	イエ社会	集団主義的産業化
主食	堅果実 魚介類	コメ	コメ・雑穀	コメ・雑穀・サツ マイモ→多様化

(出典：鬼頭宏「人口から読む日本の歴史」講談社学術文庫)